

福建省福清出身の在日新華僑とその僑郷

山下清海*・小木裕文**・松村公明***

張 貴民****・杜 国慶***

* 筑波大学大学院生命環境科学研究科, ** 立命館大学国際関係学部,

*** 立教大学観光学部, **** 愛媛大学教育学部

本研究の目的は、日本における老華僑にとっても、また新華僑にとっても代表的な僑郷である福建省の福清における現地調査に基づいて、僑郷としての福清の地域性、福清出身の新華僑の滞日生活の状況、そして新華僑の僑郷への影響について考察することである。

1980年代後半～1990年代前半における福清出身の新華僑は、比較的容易に取得できた就学ビザによる集団かつ大量の出国が主体であった。来日後は、日本語学校に通いながらも、渡日費用、学費などの借金返済と生活費確保のために、しだいにアルバイト中心の生活に移行し、ビザの有効期限切れとともに不法残留、不法就労の状況に陥る例が多かった。帰国は、自ら入国管理局に出頭し、不法残留であることを告げ、帰国するのが一般的であった。

1990年代後半以降には、福建省出身者に対する日本側の審査が厳格化された結果、留学・就学ビザ取得が以前より難しくなり、福清からの新華僑の送出先としては、日本以外の欧米、オセアニアなどへも拡散している。

在日の新華僑が僑郷に及ぼした影響としては、住宅の新改築、都市中心部への転居、農業労働力の流出に伴う農業の衰退と福清の外部からの労働人口の流入などが指摘できる。また、新華僑が日本で得た貯金は、彼らの子女がよりよい教育を受けるための資金や、さらには日本に限らず欧米など海外への留学資金に回される場合が多く、結果として、新華僑の再生産を促す結果となった。

キーワード：新華僑、老華僑、僑郷、福建省、福清市

I はじめに

1978年末以降の中国における改革開放政策の推進に伴い、出稼ぎや留学などで世界各地へ出国する中国人が急増した。改革開放後、海外へ出国した中国人を、中国では「中国新移民」と呼んでいる。日本においては、1972年の日中国交正常化を境に、それ以前から在留している「老華僑」に対して、それ以後新たに来日した中国人すなわち中国人ニューカマーは「新華僑」とも呼ばれる。日本においても、新華僑が著しく増加したのは、中国の改革開放後である。

本稿では、老華僑と対比しながら新華僑について考察を進めていくために、主として改革開放以後、来日した中国人に対して新華僑の用語を使用

する。

法務省の『在留外国人統計』によれば、1980年に52,896人であった日本在留中国人（中国籍保有者）は、2007年には11.5倍増加して606,889人となり、これまでの韓国・朝鮮人（同年593,489人）を抜いて、国籍別で初めて中国人が最大の在日外国人となった。翌2008年の在留中国人は655,377人を数え、わずか1年間で48,488人も増加した。

中国では老華僑の主要な出身地は、「僑郷」（「華僑の故郷」の意味）と呼ばれてきた。増加する新華僑が伝統的な僑郷といかなる関係をもっているのか、新華僑にとっての僑郷はどこなのか、新華僑はいかなるプロセスを経て来日するのか、海外渡航者が多い僑郷はどのような地域性を有しているのか、海外渡航者は僑郷にいかなる影響を及ぼ

すのかなど、新華僑と中国の僑郷との相互関係について考察することは、学術的のみならず、多数の新華僑を受け入れる日本にとって、社会的にも重要な意義をもつと考えられる。

著者の一人、山下は、東南アジアの華人社会と彼らの僑郷との社会経済的な結びつきについて、東南アジアおよび福建省、広東省、海南省における現地調査に基づいて研究を行った(山下、2002)。この研究は、東南アジア在留の老華僑と僑郷との相互関係に関する研究と位置付けることができる。一方、日本在留の老華僑の代表的な僑郷として挙げられるのは、広東省中山市、鶴山市(江門市管轄)、高明市(仏山市管轄)、福建省福清市(福州市管轄)、浙江省青田県(麗水市管轄)などであろう。また、日本在留の新華僑の出身地は、老華僑に比べ中国全土に分散する傾向があるが、代表的な新華僑の僑郷としては、福建省福清市、吉林省延辺朝鮮族自治州の延吉市、黒竜江省ハルビン市の方正県などをあげることができよう。

上述した僑郷の中で、山下は、福建省福清市は、老華僑に限らず新華僑にとっても、主要な僑郷となっていることに注目してきた。そこで、本研究では、福清市を研究対象地域として取り上げる。筆者らは、吉林省延吉市についても、在日新華僑の新しい僑郷として調査を行い、すでに中間的な成果を報告している(山下ほか、2008)。山下は、1988年に初めて福清県(1990年に市に昇格。以後、本稿では市・県の名称を省略し、単に福清と呼ぶ)を訪れ、以後、1989年、1993年、2002年に予備的な調査を行ってきた。また、著者の一人、小木も僑郷としての福清と海外在住の福清移民とのネットワークについての調査・研究を進めてきた(小木、2001；2009)。このような過程で、老華僑と同時に新華僑の僑郷として、急速に経済発展し、日本との関係を深めていく福清の本格的な調査研究を行う計画を立て、2007年および2008年に現地

調査を実施した。

次に、新華僑および僑郷に関する先行研究について検討しておきたい。中国の改革開放以降の新華僑の増加に伴い、従来、歴史的側面に力点を置いた研究が多かった華人(華僑)研究も、新華僑、僑郷、華人ネットワークなどに関する研究が増加した。

本研究が研究対象とする福建省の僑郷研究では、厦門大学の南洋研究院が中心になり、これまでに多くの成果をあげている。従来、南洋研究院の調査は福建省南部の晋江市(泉州市管轄)を中心に行われ、その成果は庄編(2002)にまとめられている。2002年以降、南洋研究院は重点研究プロジェクトとして主に福建省北部の僑郷地域を対象にして、福建省僑務弁公室と共同で福州、長楽、福清の僑郷調査を行い、その成果を徐々に発表してきている。聞き取り調査やアンケート調査に関する報告資料(庄国土編『福建海外移民調査資料』2004年)は未公開であるが、研究に加わった研究者がそれらの報告資料に基づいて論文を執筆し、それぞれ公表する方法を取っている(庄、2006b)。福州・福清の不法移民、新華僑、僑郷、僑郷ネットワークを含めて、今まで公表された主な成果としては、以下のものがある。

銭(2000)は福州、福清、長楽、平潭、連江の海外出稼ぎ者や密航者が多い僑郷について紹介し、「台湾は平潭を恐れ、日本は福清を恐れ、アメリカは長楽を恐れ、イギリスは亭江を恐れ、世界は福建を恐れる」¹⁾という当時の流行語を最初に論文で紹介した。施(2000)も福清の僑郷出身の不法移民を含めた新華僑について、歴史的な原因と現状について考察している。また、王(2002)も福建省出身の新華僑の規模、不法移民の類型・実態、新華僑の僑郷に対する影響などを論じている。

これらの研究を引き継ぎ、沈(2004)は、アメリカに渡航する福州出身の不法移民について、事

例研究を行っている。また、庄 (2003) は、この30年間に世界へ広がった新華僑の出国要因、移民類型について言及し、送出元 (福州・福清) および送出先 (ニューヨーク) の実態調査を踏まえて、アメリカへの福州出身新華僑について考察している。また、EUにおける福建省出身の新華僑の研究に取り組んでいる李は、僑郷アイデンティティ、僑郷ネットワーク、僑郷文化について、それぞれ研究を進展させている (李主編, 2006)。

一方、ヨーロッパの研究者による Pieke et al. (2004) は、ハンガリー、イギリス、イタリアなどのヨーロッパにおける福建省出身者の移住やコミュニティなどについて、個別の詳細な聞き取り調査に基づいて明らかにしている。

日本への福清出身の新華僑に関しては、郭・庄 (2008) は日本における福清出身の新華僑の増加過程、その要因および生活実態について、日本での聞き取り調査を踏まえて論じている。また、福清から日本への移民の歴史と現状については、許が日本から帰国した福清出身者へアンケート調査を行い、出国・帰国の要因、日本での生活、日本・日本人への印象などを考察し、併せて神戸に在留する福清出身の新華僑に対して詳細な調査も行っている (許, 2006)。このほか、李 (2004) は、在日福清人の特色について考察している。

以上検討してきた先行研究をみると、老華僑だけでなく新華僑にとっての僑郷の地域性や、福清から日本への新華僑の送出過程、僑郷と在日の福清出身者の相互関係などについては、依然として解明されていない部分が多く、福清における現地調査が不可欠であると思われる。

そこで、本研究では、僑郷としての福清の地域性を明らかにするとともに、福清出身の新華僑の滞日生活の状況および新華僑の僑郷への影響について考察することを目的とする。この目的を達成するために、以下のような順序と方法で研究を進

めていくことにする。まず、老華僑の伝統的な僑郷としての福清の地域性について整理しておく。次に改革開放後の新華僑の送出について、統計と聞き取り調査などから分析する。続いて、日本から帰国した新華僑への聞き取り調査に基づいて、これまで十分に明らかにされてこなかった日本渡航の過程、滞日生活の状況について論じる。最後に、新華僑が僑郷に及ぼした影響について検討する。

なお、福清における現地調査は、前述した山下の予備調査を受けて、2007年8月および2008年12月に実施した。現地調査では、日本滞在経験者 (不法残留者を含む) への面談に重点を置きながら、日本語教師 (中国人および日本人)、日本渡航希望者・予定者、日本語学習者、日系企業関係者、福清市および福州市行政関係者などからも聞き取り、資料収集を行った。また、それらと並行して、在日の福清籍の新華僑および老華僑からも聞き取り調査を実施した。

II 伝統的僑郷としての福清と福清出身の老華僑

1. 福清の概要

福清は福建省中部沿海に位置している。福清の略称は「融」であり、福清市人民政府が位置する福清の中心部は融城と呼ばれる。1990年、福清は県から市 (中国では「県級市」〔県レベルの市〕と呼ばれる) に昇格した。福建省には9つの地域レベルの市 (地級市) があるが、福建省の省都、福州市は地級市であり、福清市は福州市に属し、福州市の中の1つの県級市である (図1)。福清の中心部である融城から福州中心部までは、自動車です約1時間の距離である。福清の市域面積は1,932km² (福州市地図冊編集委員会, 2002: 69)、市の人口は1,231,288人 (2007年末) である (福清市統計局・国家統計局福清調査隊, 2008)。

福清の自然的条件を概観する。まず、福清の地

形をみると、北西部から南東部へ傾斜している。北西部は戴雲山脈の支脈に属し、市内の最高峰、古崖山尾（標高約1,000m）はここに位置する。地形は主に低山丘陵で、その間は狭い洪積・沖積平野になっている。南東部は台地と低い丘陵が広く分布し、沖積平野と海岸平野に融城・竜田・高山・東瀚などの主要な鎮が点在している。南部の竜高半島は福清湾と興化湾に突き出ている。海岸は小高い台地や岩石海岸になり、大小の港が存在し、沖合には大小100の島々が点在している（図2）。

次に福清の気候をみると、年平均気温19.6℃、1月の平均気温10.8℃、7月の平均気温28.2℃であり、年間降水量1,326mm、無霜期は346日である。また、竜江など数本の河川が市内を流れ、東張ダムなど4つのダムがある。気象条件としては

農業に適しているが、平坦な土地が少なく、耕地面積は309km²である²⁾。

福清は宋代初期には10の郷に区分され、元明清代は6隅が設置され、1946年に6鎮（玉融、東張、海口、漁溪、龍田、高山）と6郷（平化、崇孝、仁義、東瀚、光賢、江陰）に区分され、現在の郷鎮分布の骨格が形成された。1984年には21あった人民公社が廃止され、郷鎮に改められた。都市化の進展に伴い、2003年に市中心部に街道弁事処を1つ、その他すべての郷を鎮に昇格して、合計で20鎮の行政単位となった。さらに2005年に市中心部の音西・陽鎮・宏路の3つの鎮を廃止して、7つの街道弁事処を設置した。これによって福清の市街地面積は244.5km²になり、市街地人口は45.8万人となった³⁾。



図1 福建省における福清の位置

(筆者作成)

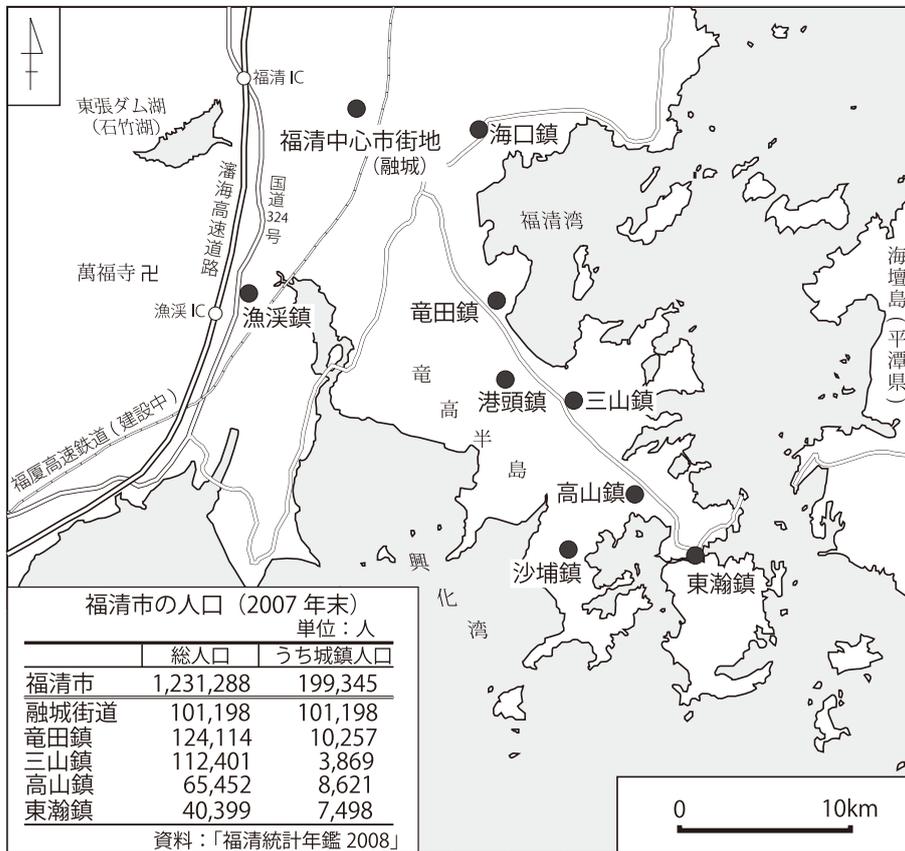


図2 福清の概要

(筆者作成)

2. 老華僑の海外移住

1) 東南アジアへの老華僑の移住

福建省は田畑が少なく山間部の多い地域であり、古くから「八山一水一分田」といわれ、山が多く、耕地が少ない地域であった。この貧困地域から清代末にクーリー（苦力）として単純労働者が大量に海外に送出されていった。

海外在住の福建省籍の華人（老華僑および新華僑）は1,000万人に達し、そのうち900万人が東南アジアに居住しているという（林等主編，2006：31）。一般に福建省籍の華人は、次のように大別することができる。すなわち、閩南人、福州人、福清人、興化人、客家人である。東南アジアの華

人社会では福建省出身者の最大勢力である閩南人を一般に「福建人」と呼んでいる。「閩」は福建の略称であり、「閩南」は福建省南部、「閩北」は福建省北部の地域を指す。また、客家人も独自のグループを形成し、福建省を越えて、広東省などに跨って分布している。旧福州府には、福州、閩侯、閩清、古田、福清、長樂、連江、永泰、屏南、羅源、平潭の市・県が含まれ、これらの地域の出身者が広義の「福州人」である。しかし、福清地方の方言は、福州とは若干異なるため、福清出身者は福州人とは別に「福清人」と呼ばれることが多く、東南アジアの福清人は、福州人とは別の同郷会館（福清会館など）を組織し、異なる華人方言集団と

して区別することがある。福建省は前述したように山がちな地形で、交通の不便さによって人的交流も限定されたため、地域により方言の差異が大きかった(山下, 2002: 152-157)。

前述したように福清は1990年に県から市に昇格し、インフラ設備も充実した都市に変貌している。海外各地に居住する福清出身者は78.1万人に上るといふ⁴⁾。福清市内すべての鎮が僑郷であるとみなしてよいが、それぞれの鎮が、歴史的に海外の特定の地域の福清出身者とのネットワークをもっている。例えば、日本への移住者を多く送出した地域は、竜高半島南部の三山・高山・東瀚・沙埔などの鎮である。一方、インドネシアでは海口鎮、漁溪鎮の出身者が多く、シンガポール・マレーシアの場合は港頭鎮の出身者が多かった(福清市編纂委員会, 1994: 952)。

海外の福建省籍の老華僑の社会の中では、福清出身者は少数派であった(山下, 2000, p.46)。清代末・民国時代から中国の改革開放までは、福清出身者の移住先は、インドネシア、シンガポール、日本、マレーシア、アメリカなど限られた国に集中していた。

福清の僑郷は東南アジア、日本などに在留する老華僑の投資や寄付によって飛躍的な発展を遂げてきた。福清の経済発展が顕著になった理由は、僑郷という特色を生かして、海外の老華僑の資本を誘致する経済政策が功を奏したからである。この成功によって、台湾企業や外国企業の福清への進出を呼び込むことになった。福清市人民政府はこれを三資企業誘致政策と呼んで、法整備や投資の環境作りを行ってきた。海外の老華僑の資本の中で、この地に最初に投資したのも、福清籍の老華僑であった(童, 1999: 87)。経済発展が遅れた故郷を援助するために、多くの福清籍の老華僑が「融情」(福清に対する郷土愛)によって、投資や寄付を行った。その中で、最大のものはインド

ネシアの著名な老華僑、スドノ・サリム(中国名、林紹良)が創設したサリム集団が中心となって多国籍企業と共同で開発を手掛けた融僑経済技術開発区である。この開発区は福清の中央部に位置し、福清の経済発展の中心を担っている。この開発区の成功が呼び水となり、老華僑の資本の協力の下で元洪投資区が福清港一帯に開発された。この投資区内にはスドノ・サリムの出身地である海口鎮牛宅村があり、サリムの寄付は水道、道路、橋、学校、テレビ受信設備、幼稚園、養老院、ホール、奨学金など多岐にわたる。また、同村の周辺に工場を誘致し、村の経済を活性化させている(廖, 1999)。

2) 日本への老華僑の移住

今日、経済発展が著しい福清ではあるが、改革開放以前、福清は貧困地域であった。明治以降、福清の海岸部の農村や半農半漁村から日本へ出稼ぎに行く者が多かった。長崎ちゃんぽんの考案者として知られる陳平順(1873~1939)も、1892(明治25)年に長崎へ渡った(陳, 2009: 17-26)。日本における福清出身者の多くは長崎に上陸後、主として反物行商に従事しながら、九州各地、さらには北海道、樺太まで全国各地に拡散して行った(茅原・森栗, 1989)。第二次世界大戦後、これら福清出身者は呉服の反物行商をしながら全国各地に定着して、衣料品店や中国料理店の経営を行うものが多くなった。

正確な統計はないが、筆者のこれまでの在日老華僑に関する調査から推定して、日本における福建省籍の老華僑の大多数は、福清出身者であると考えて差し支えなからう。『昭和49年在留外国人統計』(法務省入国管理局編, 1975)によれば、1972年の日中国交正常化から間もない1974年における福建省籍の在日中国人は5,178人であり、これは在日中国人全体(46,944人)の11.0%である。福建省籍者の分布をみると、兵庫県901人、

大阪府499人，神奈川県450人，東京都432人，長崎県399人，京都府322人の順となっていた。

日本における福清籍の著名な老華僑としては，林同春（1925～2009），林康治（1930～），林其根（1920～）を挙げることができる。林同春は1925年に福清の東瀚鎮で出生した。同郷人とともに日本で呉服の反物行商に従事していた父親を追って，林同春は9歳の時に来日した。第二次世界大戦後，古着の行商や繊維の卸売で成功し，神戸華僑総会会長，神戸中華総商会会長などを務めた（林，1997；2007）。林康治は1930年に鳥取県境港市で出生したが，両親はともに福清の沙埔鎮（父親は赤礁，母親は西葉）の出身である。父親は来日後，呉服の反物行商に従事した。第二次世界大戦後，林康治はやみ市で衣類を売って成功し，衣料品店を開いた。1960年，熊本市でスーパーマーケット，ニコニコ堂（開業当初は衣料品専門。2002年民事再生手続き申請）を創業した（林，1996）。また，福岡華僑総会会長を長年務めた林其根（1920年，長崎で出生）の祖父は，林康治の父親と同じ福清の沙埔鎮赤礁出身で，明治時代に長崎に到着した。林其根は三代目の老華僑であり，多額の寄付をして，原籍の沙埔鎮をはじめ，各地に小学校，幼稚園，診療所などを建設した「愛国華僑」として中国で評価されている（張，2008）。

日本在留の福清籍の老華僑は，呉服の反物行商で日本各地に分散したが，彼らは，他地域の在日老華僑よりも「福清人」としてのアイデンティティを強く保持してきた。福清籍の老華僑は1961年，第1回の旅日全国福建同郷懇親会（準備委員会委員長は林同春）を京都で開催したが（旅日福建同郷懇親会編集部編，1982），これは今日まで継続しており，2010年には第50回の東京大会が開催される予定である。

仏教交流という面からみても，福清と日本との関係は密接であった。長崎には興福寺，福済寺，

崇福寺の唐寺があったが，歴代住職の原籍をみると，興福寺が浙江省杭州，福済寺が福建省泉州，崇福寺が福建省福州・福清・長楽および福清の西隣の興化（現，莆田市）とされている。なかでも特記されるのは，福清にある黄檗山萬福寺（図3）の隠元が来日し，江戸幕府の援助を受けて京都府宇治に臨済宗萬福寺を建立したことである。この黄檗宗が当時の禅宗に与えた影響は大きく，西日本の大名を中心とする武家階層のなかに帰依するものが多かった。隠元に伴ってやってきた高僧，文人，技術者が仏閣建築，仏像彫刻，書画，精進料理，医薬，造園，開墾，印刷などにも幅広い影響を与えた。江戸初期から中期まで萬福寺の歴代住持は，ほとんどが福建から渡来した。そのため，伝統的な儀式作法，法式は中国大陸，台湾，東南アジアの中国系寺院で行なわれている仏教儀礼と共通している。現在，京都府宇治市の萬福寺は，在日老華僑が信仰する寺としても知られている。毎年10月中旬，普度勝会が行なわれ，全国から多数の福建籍の老華僑が集まる（辻，1938；今関，1928：78；山田編，1983：401-402）。



図3 黄檗山萬福寺
（漁溪鎮，2007年8月）

Ⅲ 改革開放後の新華僑の送出国

1. 労務輸出の増加

改革開放後の中国においては、国の政策として労働者の海外への「輸出」、すなわち労務輸出が進められてきた。労務輸出された中国人が必ずしも新華僑ではないが、中国からの新華僑の送出国において、労務輸出は重要な役割を果たしている。労務輸出の統計において、福清に関する統計は入手が困難であったため、ここでは福建省レベルでの労務輸出の傾向について概観する。

改革開放政策の実施以来、グローバル化が進展する中で、中国の余剰労働力は、国内に留まらず海外へ送われる傾向がみられる。2007年末に中国の人力資源・社会保障部に設立認可を得た海外就労仲介会社は500社に増え、労働者の海外送出国すなわち労務輸出の基本的な管理体制は整ってきている（張，2008）。2007年に労務輸出された海外就労者は6.5万人に上る（中華人民共和国人力資源和社会保障部，2008；2009）。

2006年における主要な労務輸出国（国・地域）をみると、日本（6.5万人）が最多で、続いてシ

ンガポール（3.1万人）、マカオ（2.4万人）、ロシア（2.3万人）、香港（2.0万人）の順であった。また、2006年末現在、海外就労者数も日本が14.3万人と最も多く、これに続いてシンガポール（8.5万人）、韓国（5.9万人）、マカオ（3.8万人）、アルジェリア（2.9万人）となり、これらを合計すると、全体の52.4%を占める（中国服務貿易指南網，2008a；2008b）。1987年の海外就労者数は3.2万人であったが、2006年には47.5万人まで増加した（中国統計局貿易外経統計司，2007）。労働者の業務内容は労務輸出国先によって異なるが、日本における中国人研修生は、主に縫製業、機械加工業、食品加工業、建築業、農業などの部門に多く従事している（王，2007；楊，2006）。

図4で示すように、海外在留の福建省出身の海外就労者数は、1984年に2,000人を超えた。1990年までは海外就労者数も営業額も、年10%以上の増加率を維持し、福建省は、中国国内においても早い段階から積極的に労務輸出を進めてきた地域であった。1990～94年には、営業額も海外就労者数も年15%以上の著しい増加を示し、福建省の海外就労者数の増加は1997年まで続いた。しか

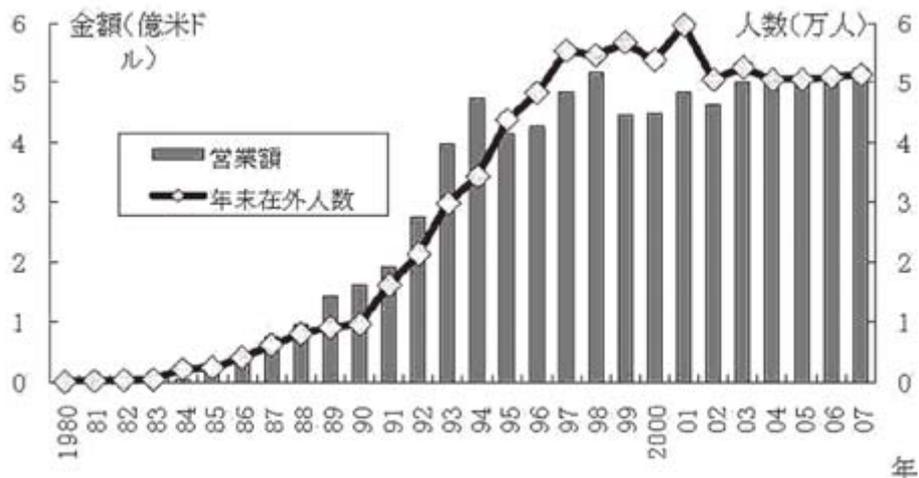


図4 福建省労務輸出の変化（1980～2007年）
（福建省統計局・国家統計局福建調査総隊，2008により筆者作成）

し、1998年以降は停滞している。中国全体で見ると、2002～06年は、労務輸出の営業額は大きく増加しており、中国の労務輸出が労働者の量（人数）を重視する段階から、労働力の単価と業務内容を重視する段階に移行しつつあることを示している。しかし、福建省の場合、この期間中の営業額は上昇しておらず、福建省では労務輸出の業務内容の転換と労働力単価の上昇が十分に図れなかったと言えよう。

福建省の労務輸出が中国に占める割合は、海外就労者数が1991年から、また営業額は1999年から、それぞれ減少しつつある。また、経済効果を示す1人当たり営業額は、1987年から国の水準以下の低いレベルに留まっている。

2. 福清からの新華僑の送出

改革開放政策の進展に伴い、中国政府の海外渡航の緩和（留学、研修、華僑親族への訪問、旅行、ビジネス）や経済活動のグローバル化によって、中国人の海外渡航が活発になった。この現象は1990年代に一層顕著になり、現在まで衰えることなく続いている。2007年当時の報道によれば、福清からは合法的に毎年、1.2万～1.5万人が出国し、非正規の出国を加えるとこの数は倍になると推定されている⁵⁾。現在、福清やその他の福州市域からの海外への人口移動は、アメリカ（特にニューヨーク）、イギリス、オーストラリア、カナダ、日本、ヨーロッパ、ラテンアメリカを目指す動きが顕著であり、その数は増加している。

図5は、中国国家統計局が行った全国77,417調査区における1%サンプリング調査の結果を用いて、省・直轄市・自治区ごとの海外就労者・留学生の人数を示したものである。この調査では1,699万人の住民が調査対象となった。この図によれば、2005年11月1日現在、海外における就労者および留学生の合計の人数は、福建省が232人で全国最

多で、これに続く江蘇省の154人、北京市の58人を大きく引き離している。また、この図からは、中国における新華僑の送出地域が東部沿海地域や東北三省（黒竜江省・吉林省・遼寧省）に集中する傾向を如実に示している。これは伝統的に多くの老華僑を送り出した僑郷が沿海地域に多いこと、東北三省が地理的にロシア・韓国・日本に近くて利便性が高いことを反映している。さらに、従来海外への人口移動があまり見られなかった内陸部からも、交通の発達や特に出国に関する情報の伝播などにより、一定規模の海外就労者や留学生を送出するようになってきたことも、この図から読み取れる。

改革開放以後、福清出身の新華僑の移住先はしだいに世界各地に広がり、現在では115の国・地域（香港5.5万人、マカオ0.5万人）に拡大し、人数も78万人を超えている。ただし、この数字には密出国や不法滞在者などは含まれていない⁶⁾。

近年、福清出身の新華僑が目指す国・地域は、老華僑の時代のように東南アジアや日本に向かう流れの他に、新たにアメリカ、カナダ、オセアニア、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アフリカなどへ向かう流れが生じている。福清市人民政府の推計によれば、福清出身の新華僑からの海外送金は毎年200億元（2007年当時、1元＝約15.5円）とされ、若年層の就職難や農村の労働力の過剰などの問題を軽減する役割を果たしている⁷⁾。

参考までに、福清の北隣の長楽（福清と同じ福州市管轄の県級市）の例をみよう。長楽の人口は69万人（2004年統計）であるが、この地域から過去20年間にアメリカへ20万人が移住している（庄、2006a）。長楽の海外送金収入（中国銀行など）は3億米ドルで、これに地下銀行、闇換金、帰国時に携帯する現金などを入れると数倍になると推計されている（尹、2004）。

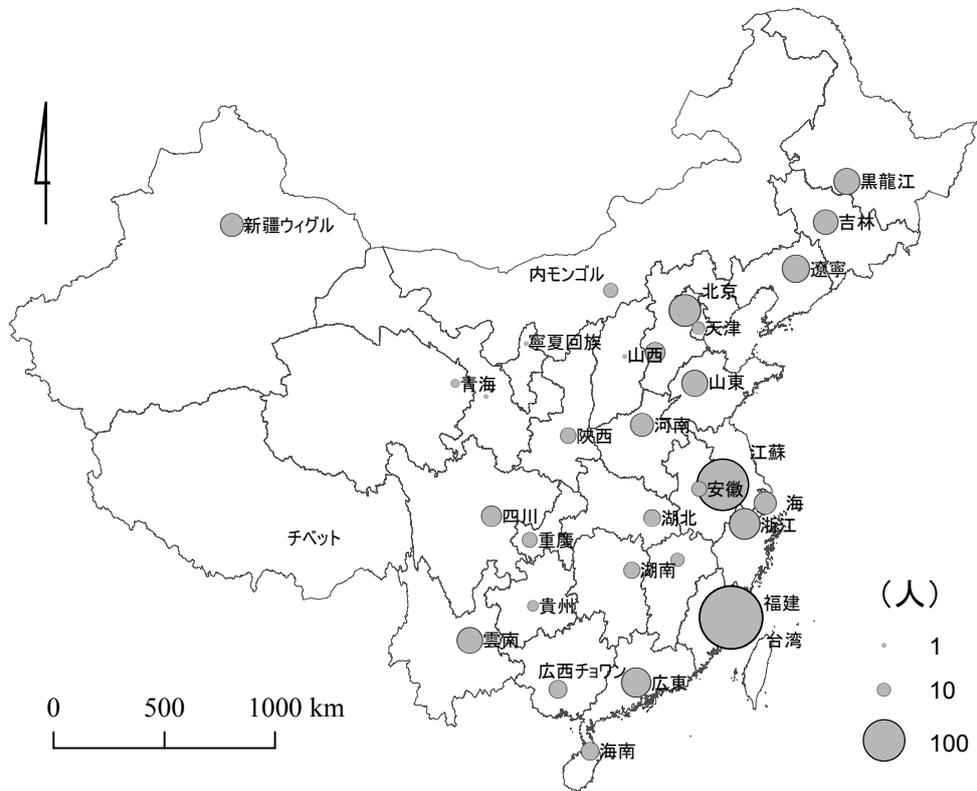


図5 中国における地域別の海外就労者および留学生の人数 (2005年)

(「中華人民共和国国家統計局, 2005年全国1%人口抽樣調査數據」
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/renkou/2005/html/0102.htm>
 (最終確認日: 2010年2月15日) により作成. 張 (2009) より再掲載)

IV 日本における福清出身新華僑の増加と滞日生活

1. 福清出身新華僑の増加

新華僑の海外移住の形態はいくつかに類型化できるが、福清出身者の場合、不法移民や留学移民がその主流であった。日本の場合は、ビザの関係で留学移民の中に就学生と留学生が含まれる。就学生は日本語学校や専修学校（高等課程・一般課程）に在籍するもので、ビザは通常半年または1年が与えられる。過去、この制度を利用して、就労目的で来日する者が多かった。

日本において新華僑が急増したのは、1980年代後半である（図6）。1988年には、日本入国ビザの

早期発給を求めた中国人青年が、上海日本領事館前に連日座り込む事件が起こった。彼らの中には、上海人とともに、福建人が多く含まれていた。1980年代後半に来日した新華僑の主要な出身地は、上海出身者と福建出身者（その大半は福清出身者）であった。日本において、福清出身の新華僑の増加の背景には、在日の老華僑を多数送出した主要な僑郷の一つである福清と日本との密接な関係があった。すなわち、福清出身の老華僑の存在が、日本への渡航を促した。福清出身の老華僑の中には、祖父や父親の故郷の発展のために、福清に学校を建設し、社会事業に寄付を行うなどの貢献を行ってきた。このため、日本には経済的に

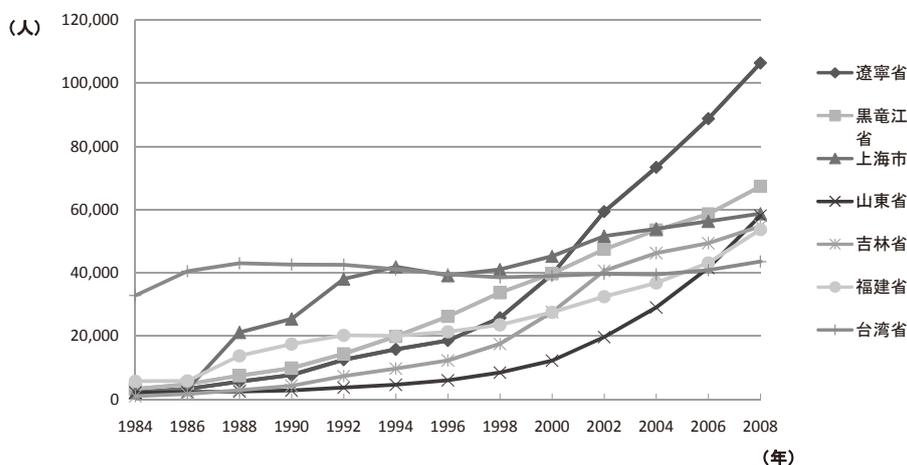


図6 出身地別にみた在日中国人の人口の推移(1984～2008年)

(『在留外国人統計』(各年版)により筆者作成)

成功した同郷人が多いと認識され、日本への強い親近感が醸成されてきた。1980年代後半、中国人就学生が日本で身元保証人を探すことは非常に困難であったために、就学生を希望する者は、身元保証人を紹介するブローカーに金を支払うことが多かった。このような状況下で、福清出身の老華僑の中には、福清の親族や同郷人が来日する場合に、身元保証人を引き受ける場合が少なくなかった。

正確な統計はないが、1980年代後半から90年代前半に来日した福清出身者の中には、不法就労を行い、不法残留者となった者が多く含まれる。さらに、犯罪に加担する者もあり、日本の新聞・テレビなどでは、中国人が関わる犯罪に関する報道の中で、「容疑者は福建省出身者」とたびたび報じられ、一般の日本人には、中国人の犯罪と福建という地名が強く結び付けられていった⁸⁾。福建省出身者の日本への就学生ビザ申請の際、日本側の審査は中国の他地域よりも厳しいと、福清では受け止められている。

福清の在日新華僑を概観すると、改革開放以降に出国した就労目的と密航⁹⁾中心の日本渡航第一

世代から、最近の第二世代と呼ばれる若年層の日本渡航についても変化が現われてきている。福清の海外渡航の世代交代の変化については、福清のある高校を卒業したクラス54人に対して個別調査を行った翁の興味深い研究がある(翁, 2005)。このクラスでは卒業後、6年以内に21人の卒業生が出国している。出国方法については、19人が合法的な留学出国をしている。残りの2名のうち1人は留学した後、退学して不法残留しながら働いており、もう1人は密航してカナダに渡り、一人っ子政策による迫害という理由で移民申請を行い受理されている。17人の卒業生の両親または親族が海外に渡った経験があるか、または海外に滞在している。合法的に留学出国した19人のうち15名が日本に滞在している。

1990年代前半と違い、第二世代の多くは合法的な留学出国であり、学歴も高くなっている。この原因として、第一世代の移住先での定着化による親族・同郷ネットワークの拡大と稼いだ資金の蓄積によって、第二世代の教育資金が豊かになり、また留学費用の調達が可能になったことが指摘できる。

福清出身者の日本への合法的な留学を増加させた要因として、大学・大学院の留学生枠の拡大に伴い、福清・福州に対する入国管理局のビザ発給の審査基準が緩和されたこと、卒業後の就職枠の拡大、アルバイトの制限時間の拡大、受験チャンスの増加など留学生試験や留学生の生活環境が変化したことなどがあげられる。また、不法残留に関する罰則・取り締まりの強化も、不法入国者の減少につながった。不法入国や不法残留という危険な手段よりも、安全かつ合法的留学の方が、結果的に経済的であるということが浸透し、このことが合法的な出国を促した。

合法的な就労目的の日本渡航に関しては、研究生・実習生による滞在資格や技能の資格での来日が増えている。筆者が調査を行った福清の高山鎮には、日本語・英語などの外国語学校や留学斡旋会社が多く見られた(図7)。2008年の調査では、それ以前の調査時に比べ、「出国厨师考証培訓」(海外出国用の調理師資格の養成)の看板を掲げた学校が増加した(図8)。このような学校では、中国料理の調理師資格を習得させ、その資格で技能労働などのビザを取得し、海外出国を斡旋するものである。すでに日本、シンガポールなどで、このような調理師の受け入れが行われており、日本の中国料理のチェーン店が積極的に受け入れている¹⁰⁾。日本に定住した新華僑が経営する人材受け入れ会社も設立され、中国各地に連絡事務所を設けて来日希望者を募集している。

2. 新華僑の個別事例の分析

本節においては、福清において実施した日本渡航経験者からの聞き取り調査をもとに、福清出身の新華僑の実態について考察する。聞き取り調査は、2007年8月と2008年12月に福清において実施した。来日後の生活形態を詳細に聞き取ることができた7名の日本滞在期間について、図9に示



図7 2002年当時の高山鎮中心部
(2002年8月)
「東京」、「日本語」などの看板が目立った。



図8 「出国厨师考証培訓」(海外出国用の調理師資格養成)の学校の看板
(高山鎮, 2007年8月)

した。このうち、男性Bとその妻G、ならびに女性Dの事例について、詳細にみていくことにする。

1) BおよびG夫妻の事例

ここで取り上げるBおよびGの日本滞在中のおもな状況については、表1に示したとおりである。

Bは福清の高山鎮出身で、就学ビザを取得して、1989年、単身で来日し、受け入れ先となった埼玉県南部の日本語学校に入学した。住居となった東京都豊島区東池袋の老朽化したアパートの家

賃は月4万円で、福清出身の友人と6畳1間の共同生活を開始した。日本語学校の授業は午前中に終わるため、午後1時～午後10時まで、日本語学校に近接した埼玉県内の自動車部品工場で働いた。工場の時給は1,100円であった。1991年に日本語学校を修了するとともに、九州地方の私立大学に合格したが、資金不足のため入学を断念した。1992年に都内の専門学校に入学したが、これはビザ延長を目的とする便宜的な入学にすぎず、ほとんど通学しなかった。すなわちBは、この時点で実質的に不法残留(オーバーステイ)の状態となった。そのため、同専門学校在学中には、アルバイトの時間を増やし、午前8時～12時の間、新たに都内のスーパーマーケットで働き始めた。1993年には、スーパーマーケットの勤務時間を午後2時～午後8時とするとともに、上述の自動車部品工場は辞めて、新たに都内の中国料理店で午後9時～深夜3時まで働くことにした。この時点でBの全生活が出稼ぎ形態へ転換した。1995年に同専門学校を修了すると、名目上も不法残留の段階に至ったこともあり、同年末、入国管理局に自ら

出頭した後、自費で帰国した。Bは帰国を決心した理由について、「もう疲れた」ためと説明している。

しかしながら、2003年にBの子女が海外の大学に入学すると、Bは妻Gを同行して子女の大学の入学式に出席するが、帰国途上に3日間のトランジットビザを利用して、成田空港から日本へ入国する。Bと妻Gはそのまま埼玉県南部の親族の滞在先へ身を寄せ、不法滞在生活を始めた。夫Bは午前7～午後7時まで都内の喫茶店に時給1,000円で勤務するとともに、妻Gも午前10時～午後2時半まで都内の日本料理店で働き、午後3時～午後11時までは都内の別のレストランで働いた。2006年、Bは都内のある駅で入国管理局の検問によって検挙され、中国へ強制送還された。しかし、妻Gはその後も単独で日本に残留して仕事を継続し、2008年に入国管理局に自ら出頭して自費で帰国した。Bは帰国後、さらに深圳における出稼ぎを経て、2008年現在、福清中心地の融城に新居を建築中である。

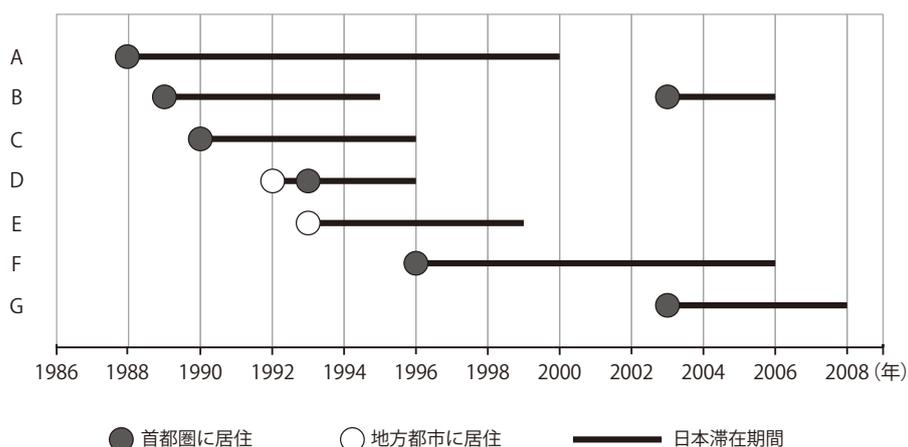


図9 渡日経験者の日本滞在期間と滞在地

注) Eは日本語学校と大学を経て正規に帰国したが、E以外はすべて日本で不法残留を経て帰国した。

(2007年8月, 2008年12月の現地調査により作成)

表1 BおよびGに関する日本滞在中のおもな状況

年	月	事 項	居住地	居住形態	家賃 (円)	勤務地 所在地	勤務時間	時給 (円)
1989	6	B: 就学ビザで渡日 日本語学校入学(現さいたま市9:00-12:00) アルバイト1開始(自動車部品加工)	池袋	6畳に2名	20,000	現・さいたま市	午後1時~ 午後10時	1,100
1991		日本語学校修了 地方私立大学合格(資金不足で入学断念)						
1992	4	専門学校入学(千代田区) 転居(池袋アパート建て替えのため) アルバイト2開始(スーパーマーケット)	王子	4.5畳に 単独	25,000	板橋区	午前8時~ 正午	1,200~ 1,600
1993		アルバイト1退職 アルバイト2時間変更 アルバイト3開始(中国料理店)				板橋区 北区	午後2時~ 午後8時 午後9時~ 午前3時	1,200~ 1,600 900
1995	3 12	速記専門学校卒業 オーバーステイの状態になる B: 東京入管に届け出て帰国(自費)						
2003	10	B: トランジットでGとともに入国 B: アルバイト開始(喫茶・レストラン) G: アルバイト1開始(レストラン) G: アルバイト2開始(和食レストラン)	埼玉県 南部	20畳に 4名		新宿区 千代田区 港区	午前7時~ 午後7時 午後3時~ 午後11時 午前10時~ 午後2時	1,000 900 900~980
2006		B: 入管の検問による検挙で強制送還						
2008		G: 東京入国管理局に自ら出頭し帰国(自費)						
2009		福清市内に自宅(5F建て)完成予定						

(2008年12月の聞き取り調査により作成)

2) Dの事例

ここで取り上げるD(女性)の日本滞在中のおもな状況については、表2に示したとおりである。Dは、就学ビザを取得して1992年に来日し、受け入れ先となる東海地方の日本語学校に入学した。日本渡航費用として6万円(1992年当時、1元=約22.9円)の借金をし、このほか当座の生活費として60万円を持参した。借金を返済するため、翌1993年に日本語学校への通学を中断し、東海地方を離れ、東京都豊島区南池袋へ単身で移動した。南池袋のアパートの家賃は、2階建モルタル造りの3畳ほどの狭い部屋で、家賃は月40,000円であった。Dは、午前5時～午前9時までビル清掃の仕事を始めるとともに、午後5時～午前0時まで居酒屋で働いた。2つの仕事の間は、交通費を節約するためにアパートに戻るのを控え、公園や

ショッピングセンターなどで時間を過ごした。借金の返済に追われて働く生活であったため、南池袋に住んでいながら池袋の繁華街で遊んだ経験はなく、友人もいない孤独な生活であったという。「毎日、帰りがかった」というが、借金返済のための貯えができた後も、帰国後の十分な生活費を稼ぐために、さらに仕事を継続し、1996年に入国管理局に自ら出頭し、自費で帰国した。

3. 福清出身新華僑の滞日生活

以上の事例にも示されるように、1980年代後半～1990年代前半における福清出身の新華僑は、比較的容易に取得できた就学ビザによる集団かつ大量の出国が主体であった。日本渡航の動機としては、家族・親族に日本渡航経験者がいることがあげられる。とくに竜高半島先端部の高山鎮と東瀚

表2 Dの日本滞在中のおもな状況

年	月	事項	居住地	居住形態	家賃 (円)	勤務地 所在地	勤務時間	時給 (円)
1992		就学ビザで渡日 「93名がビザ申請して1人 だけ合格した」	静岡市	日本語学 校の校長 の家に居 住				
1993		東京へ転出 オーバーステイの状態に なる アルバイト1開始(清掃) アルバイト2開始(居酒 屋) 「毎日帰りたと思っていた」	東京都 豊島区 南池袋	約3畳に 単独	40,000	豊島区 品川区	5:00~9:00 17:00~ 24:00	1,000 1,000
1996		東京入国管理局に自ら出 頭し帰国(自費)						
2000		福清市内に自宅建築開始						
2004		自宅(5F建て)完成						

(2007年8月の聞き取り調査により作成)

鎮出身者では、この傾向が顕著である。1983年の日本側の「留学生10万人計画」の発表、1986年の中国側の「公民出境管理法」施行（海外への自費渡航が開放）などを契機として、就学ビザの取得による日本渡航ブームが、1980年代末に頂点を迎えた。1990年に来日したC（男性）は「自分はいきたくなかったのに、皆が行くので仕方なく行った」と語っており、当時の日本渡航ブームがいかに福清から日本への渡航を促したかがよくわかる。日本渡航ブームを契機として、福清市内には日本語学校が相次いで開校し、日本語学習も盛んになった。2008年現在、福清市内の日本語学校は32校に上る。

福清から来日した者は、日本語学校に通学しながら大学への進学を目指すのが、同時に収入を得るための長時間のアルバイトが必要不可欠であった。聞き取り調査によれば、午前中は日本語学校に通学し、午後はアルバイト先へ集団で移動して、深夜まで勤務するような生活が多かった。そのうちしだいにアルバイト主体の生活が変わっていき、彼らの多くは大学進学を断念し、そのままビザの有効期間が切れて不法残留に移行する傾向にあった。彼らには、日本での生活費とともに、地元の留学斡旋業者に対する斡旋料など多額の費用を、親族・知人などから借り入れており、その借金返済、そして帰国後の生活に向けた貯蓄のために、早期に帰国することを希望しながらも、数年から10年に渡り日本に滞在することになった。たとえば上記のG（男性）は、留学斡旋業者への費用として6万元（2003年当時、1元＝約14.0円）を支払い、また日本での生活費として約5万元を持って来日しており、これらの借金は、日本渡航後において本人の大きな負担となっている。当初から蓄財目的という事例は少なく、日本渡航後に、アルバイトを中心とした生活環境の激変によって疲れ果ててしまい、大学進学が果たせず、

結果的に不法残留に陥るまで追い込まれたというのが実情である。彼らは、工場でのアルバイトの場合、1日8時間の勤務で12,000円～20,000円の収入を得ている。帰国の意志が固まると、自費で航空券を購入して、入国管理局に自ら出頭し帰国するのが一般的なパターンであった。正規の出国手続きによって中国を出国している限り、中国のパスポートの有効期限（5年間）内に帰国した場合、日本で罰せられる不法残留の罪は中国の国内法には抵触せず、帰国時に中国で罰せられるようなことはなかったという。

1990年代後半以降には、留学・就学ビザ取得に当たって、福建省出身者に対する日本側の審査が厳格化された結果、最近ではオーストラリアやニュージーランド、カナダ、ヨーロッパ諸国への渡航が主体となりつつある。2008年の福清における調査において、地元の日本語学校経営者や日本語教師は、日本留学に関して次のような共通した見解を示した。

日本の日本語学校で学ぶために就学ビザを申請する場合、東京入国管理局の審査は、中国の他地域よりも福清出身者に対して厳格であるため、福清の日本語学校や日本留学の斡旋会社は、東京入国管理局の管轄ではない福岡・広島・仙台・札幌などの地方の入国管理局管内にある日本語学校を受け入れ校に選択する傾向がある。しかし、福清の日本留学希望者は、アルバイト先やその職種が豊富で、華やかな情報が多い東京への志向が強く、来日後、地方の日本語学校で学んだ後、東京の大学に進学することを望む者が多い。

V 福清出身新華僑の僑郷への影響

1. 住宅の新改築と転居

改革開放以降に福清から出国した新華僑がもたらした海外送金や帰国時に持ち込んだ多くの資金は民間にストックされ、また個人消費（主に土地、

住宅、家電・家具などの購入)に回される傾向が強い(翁, 2005)。特に住宅の新築は景観的にも非常に顕著であり、福清が新華僑の僑郷であることを最もよく反映している。

竜高半島の特色ある集落景観の形成は、日本渡航ブームによってもたらされたものである。日本在留の福清出身の新華僑は、送金や蓄財によって、竜高半島先端部の農村地域から福清の中心地、融城の市街地にかけて、「別墅」(別荘の意味)と呼ばれる3~5階建ての洋風戸建て住宅を競って建設した(図10)。

別墅内部の空間利用をみると、住宅1階は応接兼リビングとキッチン、2~3階は寝室や家族の個室として利用される(図11)。しかし、これより上層階は生活空間としては未利用となる傾向があり、特に最上階は物干し場や物置に利用されていたり、内装工事さえ施されていなかったりする。とりわけ、両親のために建設する別墅では、近隣の別墅よりも低層となることは面子が立たないという。融城の市街地北東部の竜山麓に広がる別墅街は、竜高半島農村部の別墅と比べると瀟洒で洗練された雰囲気を持ち、高さ制限が設けられているかのように別墅街のスカイラインは水平に整えられたものとなっている(図12)。

福清市の中でも、特に三山鎮・高山鎮・東瀚鎮・沙埔鎮などの竜高半島南部(図2参照)は、家族や親類の中に、日本在留中の者、日本から帰国した者、日本渡航の準備をしている者などが多い地区である。これらの鎮出身の新華僑の帰国後の動向をみると、自分の子弟によりよい教育を与えるため、生活の利便性を求めて、出身の鎮を離れて、福清の中心地、融城や福州中心部にマンションや戸建て住宅を購入する者も少なくない(図13)。

2. 帰国新華僑の起業

福清出身の在日新華僑の中には、帰国して福清

市で起業する者も多い。筆者の聞き取り調査に基づいて、具体的な例をみていくことにする。

先に示した図9の図中に示されたAとE(ともに男性)は、それぞれ帰国後に起業した事例である。Aは就学ビザを取得して1988年に32歳で来日し、都内の日本語学校に入学した。日本語学校からアルバイト先の斡旋を受け、午前中に日本語学校の授業が終了すると、送迎バスで片道2時間をかけて千葉県内の飲料工場へ移動した。日本



図10 農村部における日本出稼ぎ者の住居
(高山鎮, 2007年8月)



図11 日本出稼ぎ者の住居のリビングルーム
(高山鎮, 2007年8月)

大きな薄型テレビと大きなリビングセット。姉は三重県で、弟は宮城県で働いて帰国した。4階建ての「別墅」には、姉弟の両親、弟夫婦、姉の5人暮らしで、全部で11部屋あるが、4階の部屋は使用していない。



図12 福清中心部, 融城の近代的な住宅地
(融城, 2008年12月)



図13 日本出稼ぎ者の「別墅」と呼ばれる住宅
(融城, 2008年12月)

語学校を修了した後、都内の国立大学へ入学を果たしたものの登校しないまま、千葉県内の石材加工業でおもに内装関係の仕事を10年間継続した。この仕事を通して、マンションなどの建設現場で「鉄製の足場」を目撃し、帰国後には、福州で足場を専門とする建設会社を知人と共同で設立した。中国では従来、建築現場の足場として竹が多く利用されてきたが、2002年に5階建て以上の建造物の建設に当たっては、鉄製の足場を使用する政策がとられたことから、Aの会社は2003年以降、順調に経営規模を拡大している。

Eは来日後、中国地方の日本語学校を経て、

1995年に同地域の大学へ進学した。1999年に卒業するとともに帰国し、2003年に福清の中心部、融城で日本語と英語を主とする外国語学校を開設した。特に子ども向けの教育を重視し、日本語教育には4名の教師が当たった。2008年にはより立地条件がよい現在地へ移転した。前述したように福清市内には2008年現在、登録された日本語学校が32校あったが、Eが経営する日本語学校の経営規模は、上位5位以内に入るまでになった。Eは、福清市をはじめとする福建省沿岸部は歴史的に海外華僑によってもたらされる外来文化の影響を受けやすい地域であるとみている。欧米文化と比べると、日本文化は受容されやすく、日本語学校の経営を通して、優秀な学生を日本に留学させたいという強い熱意をもっている。しかし、Eは日本への学生の送出国に關しては、ビザ申請に対する日本側の審査基準の不透明性が高いという。日本語に対する勉強意欲や日本語能力が高い学生が、日本の就学ビザを取得できない例が少なくなく、学生の勉強に対する情熱に対して、学校側がそれに十分に応じられないもどかしさを感じているという。Eは、外国語学校の経営のみならず、日本留学を契機として築いてきた人脈を活かして、中国茶専門店や日本料理専門店の経営に乗り出す計画を進めている。図9に示された事例のうち、Eは不法残留を経験していない唯一の事例であり、日本の大学で経済学を学びながら、日本の文化に刺激を受けたことが貴重経験であったと、日本留学の成果を積極的に評価し、活かしている。

3. 農村の変容

次に、新華僑の送出国に伴い、福清とりわけ農村がいかに変容したかについて考察する。

全体的にみると、福清の伝統的な産業は農業と漁業が中心であった。2007年の福清の第1次産業の総生産の中では、漁業が44.0%、牧畜業が

33.0%, それ以外の農業が22.5%をそれぞれ占めている(福清市統計局・国家統計局福清調査隊, 2008)。福清の農業は、地形条件によって大きく制約されている。平坦な農地が少ないため、農業の立体的土地利用が展開されてきた。標高が低く、水が得やすい場所では稲作が行われ、水田の周囲では畑作が行われ、標高のより高いところでは果樹が栽培されている。

改革開放以降、福清では農業基盤の整備が進み、営農条件が改善されたが、人口の増加によって1人当たりの耕地面積はかえって減少した。この状況は最近になっても改善されていない。2007年現在、福清の総人口は123.1万人で、そのうち83.8%は農村人口である。中心部の融城を除き全体として都市化があまり進展していない。農村人口の割合が高いにもかかわらず、福清の総生産に占める第1次産業の割合は13.7%にすぎない。

次に、2007年における福清の第1次産業の産品をみると、食糧作物132,086トン、食用油作物29,231トン、サトウキビ558トン、茶89トン、果物類54,478トン、肉類88,500トン、水産物285,156トンとなっている。また、作付面積のうち、食糧作物の作付面積は24,849haで、食糧作物以外の作付面積は27,776haであった。また、主な食糧作物の作付面積の内訳をみると、水稻18,944ha、サツマイモ14,232ha、大豆1,507ha、ジャガイモ1,094ha、トウモロコシ395haの順であった(福清市統計局・国家統計局福清調査隊, 2008)。

福清からの農業労働力の流出は、耕作放棄地の増加と外来人口の流入をもたらした。現地における聞き取り調査では、福清の経済において最も重要な地位を占めるのは、地域内では建築業、地域外では出稼ぎによる送金であり、農業は衰退を余儀なくされていることがわかった。若年層人口の流出により、農業労働力の不足が深刻化してい

る。若年層人口が出稼ぎ先から帰郷しても、農業に従事することは好まず、農作業は高齢者か福清以外からの出稼ぎ労働者に頼るほかはないのが現状である(図14, 15)。農業は他の生産部門よりも一般に収益性が低いため、耕作放棄地が目立っているが、行政側は農業振興にはあまり積極的ではない(張, 2009)。

地元労働力の都市部ないし海外への流出によって、農村部の収入は外部に頼る傾向が強い。2007



図14 請負った農地でアヒルの飼育場を造成する高齢農民 (竜田鎮, 2008年12月)

人口の海外流失と農業労働力の高齢化のために、この周辺では耕作放棄された農地が多くみられる。



図15 農地に建てた外来農民のテント住居

(海口鎮, 2008年12月)
福建省寧徳市から来た農民家族が、イチゴ栽培に従事している。

年における農家の総収入の内訳をみると、給与は2,601元(2007年当時、1元=約15.5円)、家族経営(農業・漁業・非農業など)による収入は3,658元、資産運営による収入(投資や利息)は82元となっている。これに対して、贈与による収入が2,214元と非常に多くなっている。ここに、僑郷における農家収入の構造的な特色が現れている。給与収入には出稼ぎによる収入が含まれているが、この出稼ぎによる収入は出稼ぎ先が遠くなるにつれて増加する傾向にあり、その約60%は海外から得ている(張, 2009)。また、贈与による収入のうち88.5%は出稼ぎ家族からの送金である(福清市統計局・国家統計局福清調査隊, 2008)。

4. 新華僑の再生産

日本から帰国した新華僑の生活水準の向上は、周囲の人々の日本渡航への希望を刺激した。しかし、福清出身者の日本における犯罪や不法残留の増加により、福清出身者に対する日本の入国管理局の審査が厳格化するにつれ、1980年代後半～1990年代に比べ、最近では日本渡航のビザ取得が難しくなっている。2008年の現地調査では、日本渡航者が減少する一方で、東南アジア、北アメリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカなど日本以外の外国への渡航者が増加している。福清の外国語学校も、経営の重点を日本語から英語に、日本留学から欧米・オセアニア留学の斡旋へ転換する例が多い。

在日の新華僑が僑郷に及ぼした影響としては、住宅の新改築、都市中心部への転居、農業労働力の流出に伴う農業の衰退と福清の外部からの労働人口の流入などが指摘できる。また、新華僑が日本で得た財産は、彼らの子女が福清の中心部、融城や福州の中心部の有名校への進学のように、よりよい教育を受けるための資金に費やされ、前章の事例分析で検討したBおよびG夫妻の例にみられるように、日本以外の海外への留学資金に回

される場合が多く、新華僑の再生産を促す結果となったと言えよう。

VI おわりに

本研究では、日本における老華僑にとっても、また新華僑にとっても代表的な僑郷である福建省の福清における現地調査に基づいて、僑郷としての福清の地域性、福清出身の新華僑の滞日生活の状況、そして新華僑の僑郷への影響について考察してきた。その結果、明らかになったことは、以下のようにまとめることができる。

1980年代後半～1990年代前半における福清出身の新華僑は、比較的容易に取得できた就学ビザによる集団かつ大量の出国が主体であった。来日後は、日本語学校に通いながらも、日本渡航費用、学費などの借金返済と生活費確保のために、しだいにアルバイト中心の生活に移行し、ビザの有効期限切れとともに不法残留、不法就労の状況に陥る例が多かった。帰国は、自費で購入した中国行きの航空券を持参して、自ら入国管理局に出頭し、不法残留であることを告げ、帰国するのが一般的であった。

1990年代後半以降には、福建省出身者に対する日本側のビザ審査が厳格化された結果、就学・留学などのビザ取得が以前より難しくなり、福清からの新華僑の送先としては、日本以外の欧米、オセアニアなどへ拡散している。

在日の新華僑が僑郷に及ぼした影響としては、住宅の新改築、都市中心部への転居、農業労働力の流出に伴う農業の衰退と福清の外部からの労働人口の流入などが指摘できる。また、新華僑が日本で得た蓄財は、彼らの子女がよりよい教育を受けるための資金や、さらには日本に限らず欧米など海外への留学資金に回される場合が多く、新華僑の再生産を促す結果となったと言えよう。

現地調査の遂行に際しては、東洋大学国際地域学部の張長平教授、福州鼓楼智園人材培訓中心の齊藤 靖氏、長崎華僑総会理事の郭定儀氏、立教大学大学院観光学研究科博士課程の呉晨峰さんをはじめ多数の方々から多大なご協力を得ることができました。心より感謝申し上げます。

なお、本研究は日本学術振興会・科学研究費補助金の基盤研究(B)(課題番号18401035,平成18～20年度)「増加する華人ニューカマーズの中国における送出プロセスの解明」(研究代表者:山下清海)および基盤研究(B)(課題番号21401035,平成21～24年度)「中国における日本への新華僑の送出システムに関する研究」(研究代表者:山下清海)の成果の一部である。

注

- 1) 中国語では「台湾怕平潭, 日本怕福清, 美国怕亭江, 英国怕长乐, 全世界都怕福建」。これは、台湾には平潭から、日本には福清から、アメリカには長楽から、そしてイギリスには亭江鎮(福州市馬尾区)からの密航者や不法滞在者などが多く、世界各国・地域がこのように福建省出身者を恐れていると揶揄した言い方である。
- 2) 福清市人民政府 http://www.fuqing.gov.cn/Zjfq_Show.asp?ArticleID=71 (最終閲覧日:2010年2月27日)。
- 3) 「福清市人民政府網站」http://www.fuqing.gov.cn/Zjfq_Show.asp?ArticleID=74 (最終閲覧日:2010年3月5日)。
- 4) 福州新聞網「凡有華人處 必有福清哥」<http://news.fznews.com.cn> (最終閲覧日:2008年3月4日)。
- 5) 「出国歴史悠久 福清様本:両輪移民潮の典型烙印」経済観察報, 2007年8月6日。
- 6) 前掲4)。
- 7) 前掲5)。
- 8) 張(2003:288)によれば、1989～2000年に朝日新聞、東方時報(日本発行の中国語新聞)などに掲載された在日中国人による殺人事件の中で、出身地が明記された加害者35人のうち、19人(全体の54.3%)が福建省出身者であった。同様に強盗事件では、出身地が明記された加害者42人のうち、38人(全体の90.5%)が福建省出身者であった。
- 9) 1980年代末、ベトナム難民に偽装した福清や隣接する長楽出身者が大挙して出稼ぎ目的で日本へ入国しようとした。この偽装難民を機に、福建省、特に福清が日本で注目されるようになった。
- 10) 『平成21年版在留外国人統計』(入管協会, 2009年)によれば、2008年末現在、在留外国人で在留資格が「技能」の者は25,863人であり、そのうち14,142人(全体の54.7%)が中国籍であった。「技能」資格での入国者の数は増加しており、その多くは調理師である。

文 献

- 今関天彭(1928):『日本留寓の明末諸士』北京今関研究室, 北京。
- 小木裕文(2001):僑郷としての福清社会とそのネットワークに関する一考察. 立命館国際研究, 14(1), 79-89.
- 小木裕文(2009):華人ネットワークの変容-福清華人と福清移民ネットワークを事例に-. 篠田武司・西口清勝・松下 冽編『グローバル化とリージョナリズム』357-382, 御茶の水書房.
- 茅原圭子・森栗茂一(1989):福清華僑の日本での呉服行商について. 地理学報, 27, 17-44.
- 陳 優継(2009):『ちゃんぽんと長崎華僑』長崎新聞社.
- 張 貴民(2009):僑郷における農村景観と農業-福建省福州市を例に-. 愛媛大学教育実践総合研究センター紀要, 27, 1-11.
- 張 荊(2003):『来日外国人犯罪-文化衝突からみた来日中国人犯罪』明石書店.
- 張 黎(2008):中国最新事情. かけはし, 87, 24-25.
- 辻 善之助(1938):『日支文化の交流』創元社.
- 李 国慶(2004):在日福建省福清人の移住・生活・エスニシティ-国境を越える移住者の社会適応とネットワークの構築-. 慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション, 32, 61-71.
- 林 康治(1996):『報恩感謝』熊本日日新聞社.
- 山下清海(2000):『チャイナタウン-世界に広がる華人ネットワーク』丸善.
- 山下清海(2002):『東南アジア華人社会と中国僑郷-華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』古今書院.
- 山下清海・尹 秀一・松村公明・杜 国慶(2008):在日華人ニューカマーズの中国における送出プロセス-中国東北地方の事例から-. 2008年人文地理学会大会研究発表要旨, 128-129.
- 山田信夫編(1983):『日本華僑と文化摩擦』巖南堂書店.
- 旅日福建同郷懇親会編集部編(1982):『旅日福建同郷懇親会“二十年のあゆみ”』旅日福建同郷懇親会.

- 林同春 (1997)：『橋を渡る人－華僑波乱万丈私史－』エピック。
- 林同春 (2007)：『二つの故郷－在日華僑を生きて－』エピック。
- Pieke, F., Nyiri, P., Thuno, M. and Ceccagno, A. (2004) : *Transnational Chinese: Fujianese migrants in Europe*. Stanford University Press, Stanford.
- 〔中国語文献（著者のピンイン順）〕
- 福建省統計局・国家統計局福建調査総隊 (2008)：『福建省統計年鑑2008』福建省。
- 福清市編纂委員会 (1994)：『福清市志』厦門大学出版社，厦門。
- 福清市統計局・国家統計局福清調査隊 (2008)：『福清統計年鑑2008』福清市。
- 福州市地図冊編集委員会 (2002)：『福州市地図冊』福建省地図出版社，福州市。
- 郭玉聰・庄国土 (2008)：福州赴日新移民の増長態勢及其主要原因－以福清市為例。南洋問題研究，2008年第2期，52-62。
- 李明欽主編 (2006)：『福建僑鄉調查』厦門大学出版社，厦門。
- 廖礎強 (1999)：華僑的貢獻与福清的發展。楊學濤主編『改革開放与福建華僑華人』129-141，厦門大学出版社，厦門。
- 林忠強等主編 (2006)：『東南亞的福建人』厦門大学出版社，厦門。
- 翁才敏 (2005)：福清市出国移民的代際变化研究－以該市某中学99級高三班為例。青年研究，9，17-24。
- 錢江 (2000)：震驚世界的福建非法移民潮。世界經濟論壇，2(6)，70-77。
- 沈燕清 (2004)：福建新移民在美国－二〇世紀九〇年代以来福州地区非法移民個案研究。世界民族，2004年第1期，53-59。
- 施雪琴 (2000)：改革開放以来福清僑鄉的新移民－兼談非法移民問題。華僑華人歷史研究，2000年第4期，26-31。
- 童家洲 (1999)：淺論文化背景与引進華僑華人資本。楊學濤主編『改革開放与福建華僑華人』85-98，厦門大学出版社，厦門。
- 王付兵 (2002)：福建新移民問題初探。南洋問題研究，2002年第4期，55-61。
- 王友成 (2007)：中日两国勞務合作問題及对策探討。鄭州航空工業管理学院學報 (社会科学版)，26(5)，169-171。
- 許金頂 (2006)：来来往往：福建僑鄉的歷史社会学考察。李明欽主編：『福建僑鄉調查』268-327，厦門大学出版社，厦門。
- 楊雲母 (2006)：中国对外勞務輸出分析。人口學刊，160，40-43。
- 尹雪梅 (2004)：長樂海外移民的歷史傳統。八桂僑刊，2004年第5期，20-22。
- 張可喜 (2008)：『一位旅日老華僑的半生』中国文化出版社，香港。
- 中国服務貿易指南網 (2008a)：2006年中国对外承包工程，勞務合作和設計諮詢人員分国別／地区情況 (1)。http://tradeinservices.mofcom.gov.cn/c/2008-02-28/25080.shtml (最終確認日：2009年2月3日)。
- 中国服務貿易指南網 (2008b)：2006年中国对外承包工程，勞務合作和設計諮詢人員分国別／地区情況 (2)。http://tradeinservices.mofcom.gov.cn/c/2008-02-27/25081.shtml (最終確認日：2009年2月3日)。
- 中国統計局貿易外統計司 (2007)：『中国貿易外統計年鑑2006』中国統計出版社，北京。
- 中華人民共和國人力資源和社会保障部 (2008)：2007年勞働和社会保障事業發展統計公報。http://www.molss.gov.cn/gb/zwxx/2008-06/05/content_240415.htm (最終確認日：2009年2月3日)。
- 中華人民共和國人力資源和社会保障部 (2009)：獲得「境外就業中介經營許可証」機構名錄。http://w1.mohrss.gov.cn/gb/ggfw/jwly.htm (最終確認日：2009年2月3日)。
- 庄国土 (2003)：從跳船者到東百老大街的主人－近二〇年来福州人移民美国研究。華僑華人歷史研究，2003年第3期，30-39。
- 庄国土 (2006a)：近20年福建長樂移民美国的動機和条件。華僑華人歷史研究，2006年第1期，1-11。
- 庄国土 (2006b)：論中国海外新移民：以近30年福州移民為例。世界民族，2006年第3期，1-9。
- 庄国土編 (2002)：『中国僑鄉研究』厦門大学出版社，厦門。

Chinese Newcomers Living in Japan from Fuqing City and their Influence to Hometown

YAMASHITA Kiyomi

Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

OGI Hirofumi

Faculty of International Relations, Ritsumeikan University

MATSUMURA Koumei

College of Tourism, Rikkyo University

ZHANG Guimin

Faculty of Education, Ehime University

DU Guoqing

College of Tourism, Rikkyo University

Based on field research in Fuqing City (Fujian Province, China), this paper is aimed to investigate the living situation of Chinese newcomers in Japan, as well as the regional characteristics of this representative emigrant area for both Chinese oldcomers and newcomers, and how the newcomers affected their hometown. During the period from late 1980s to early 1990s, most of newcomers from Fuqing City came to Japan in groups with easily acquired "Pre-college Student Visa". Learning in Japanese schools, such newcomers kept doing part time jobs to earn their living wages, tuition and the cost to Japan, and gradually their life goals changed to part time jobs from study. Numerous newcomers chose to stay and work illegally for a few years when their visas are no longer valid, and present themselves to the Immigration Bureau, admit their illegal stay and go back to China at last.

With the enforcement of strict examination on visa applications from Fujian Province in late 1990s, visa of student or pre-college student became quite difficult to acquire, and newcomers from Fuqing City changed their emigrant destination from Japan to other areas such as Europe, America and Oceania, etc.

Under the influence of Chinese newcomers in Japan to their hometowns, their houses were built or reformed, their families moved from suburban to urban areas, agriculture declined and labor moved in from other areas because of local labor lost. Furthermore, newcomers diverted their saving acquired in Japan for their or their children' abroad education in Europe and America as well as Japan, and as a result, stimulated the reproduction of Chinese newcomers.

Key words : Chinese newcomer, Chinese oldcomer, homeland of Chinese overseas, Fuqing City, Fujian Province